環境破壊の神宮外苑再開発計画

『環境と公害』2023 年冬号の特集②は神宮外苑再開発計画である。近代日本の文化的資産である神宮外苑の保全と継承に向け、環境破壊の計画について問題を提起する。特集にあたって、原科幸彦氏は次のようにのべている。100 年近くも親しまれてきた都心の貴重なオアシスである明治神宮外苑で、大規模な再開発計画が始まった。1926 年の創建時、風致地区第 1 号に指定された、東京の顔のひとつである。樹齢 100 年ほどのものを含む 1000 本近くもの樹木が伐採される計画への反対署名は 2022 年 11 月時点で約 11 万にもなる。さらに神宮外苑のシンボル、銀杏並木への深刻な影響も懸念される。この並木は歴史的文化的な価値も高い。神宮外苑はもともと国有地で、全国からの献金、献木、勤労奉仕により造られた日本近代都市計画の記念碑である。公共性の高いこの土地を民間企業などの利益のために使って良いものか。

大阪も酷いが、東京も酷いものだ。これまた松尾貴史さんに登場願おう（毎日新聞 47 日）。東京都の小池百合子知事は、明治神宮外苑のおびただしい数の樹木の伐採について「新たに植える木はもっと本数が多い、緑地の面積も増える」と説明する。だが、幼い低木を植えたところで、冷却効果が元通りになるのは 100 年かかるという予測もある。これからどのような科学技術の進歩で温暖化対策ができるかは想像の範囲を超えるが、少なくとも私の生きているうちにはその効果を体感する可能性はない。

環境植栽学の専門家は、こんな乱暴な伐採をすれば「ヒートアイランドは強まって神宮外苑の気温は上昇する」「100 年の大木と、新たに植える若木ではレベルが全然違う。緑の持つ効果は増えるどころか、確実に損なわれる」と警告している。これが「環境の小池」と、緑をテーマカラーにしてきた人物のやることなのだろうか。そもそも環境保護に本気ではなかったということが、樹木の伐採で都民が被る莫大な損害によって露呈してしまうことになろうとは皮肉なことだ。

最近亡くなった音楽家の坂本龍一さんが、がん闘病中に渾身の思いでしたためた「これらの樹々はどんな人にも恩恵をもたらしますが、開発によって恩恵を得るのは一握りの富裕層にしか過ぎません」と神宮外苑の再開発の再考を求める、まるで遺言とも取れる手紙を送ったが、小池氏の対応は門前払いにしたかのようだ。

記者会見で関連した質問が出ても「答えません」と「木」を鼻をくくったような冷徹な本性を惜しみなく見せつけている。

同紙同日の「斎藤幸平の分岐点、その先へ」でも、坂本龍一さんに触れているので紹介したい。坂本龍一さんが 3 月 28 日、71 歳で亡くなられた。3 月に本連載で、神宮外苑再開発の問題を取り上げたが、その後、坂本さんは病を押して、東京都の小池百合子都知事に開発計画の再考を求める公開書簡を送ってくれた。私はそのことに感激して LINE でお礼を送った。それが坂本さんとの最後のやりとりになった。

（2023 年 5 月 10 日）